

MUSEUM NEWS

秋田県立博物館ニュース

新着収蔵資料紹介

甲冑 (當世具足)

當世具足とは安土・桃山時代頃から流行した新様式の甲冑で、動きやすさを重視した作りになっています。写真の當世具足は江戸時代のもですが、保存状態は大変良好で、頬当・籠手・脛当などの小具足も完備しています。この甲冑は、湯沢に配置されていた秋田藩士の鹿子畑家に伝来していたものですが、甲冑に付いている家紋は鹿子畑家のものではなく、また小具足の包紙には「泉太郎右衛門」という人名が記されていました。以上の点から、本来は別の家の甲冑だったものが、何らかの理由で鹿子畑家の伝来品となったのではないかと考えられます。

CONTENTS

- 01 表示・目次
- 02 展示紹介 秋田県博50年のあゆみ
- 04 展示報告 かく、えがく。ー菅江真澄遺墨資料展ー
- 05 展示報告 秋田の酒と人
活動報告 第二の学校？ー博物館のセカンドスクールの利用ー
- 06 学芸ノート 環境点検を起点としたミュージアム IPMの取組
- 07 学芸ノート 朱墨の符号ー佐藤初太郎の旧蔵品ー
- 08 2026年度 展示スケジュール



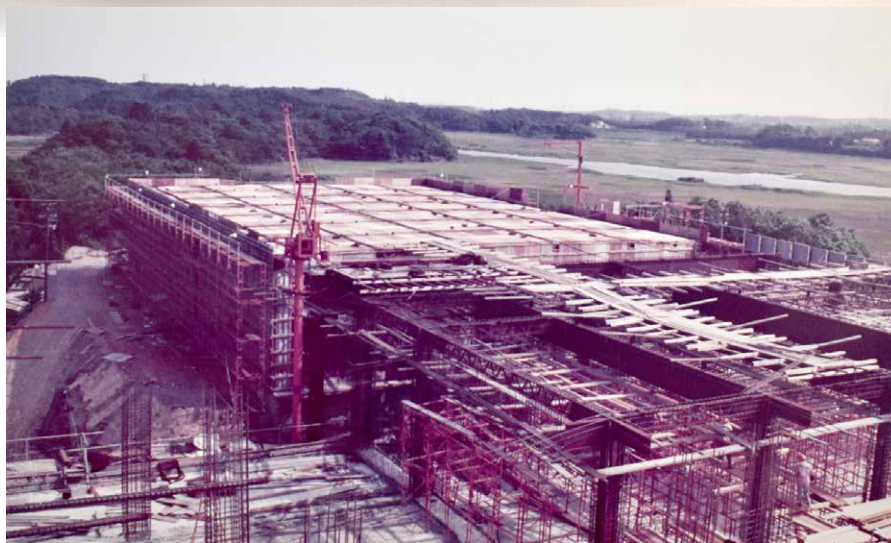
展示紹介

令和8年1月10日(土)～4月5日(日)

企画展 秋田県博50年のあゆみ

秋田県立博物館は令和7年に開館50周年の節目をむかえました。本展では博物館の誕生にまつわる資料、半世紀にわたる収集品、様々な活動を紹介しながら、博物館のあゆみを振り返ります。

(歴史部門：新堀道生)



昭和49年6月、第1展示室（現人文展示室）の建築工事の様子。



シヨウキサマの搬入

後ろの建物は開館準備の際に収集品の仮置き場としていた旧秋田銀行本店（現れんが郷土館）。



昭和49年10月、竣工間近の博物館。手前の土がむきだしの所には、スロープと駐車場が整備されました。



開館直後の博物館周辺

当初は千秋公園に建てることも検討されましたが、広い敷地を確保することが難しく、秋田市金足の地が選ばれました。昭和49年11月に竣工式が挙行され、展示設営工事を経て、50年5月に秋田県立博物館が開館しました。



**秋田藩士小貫家伝来の
江戸後期の振袖**

小野小町の物語を主題とした雅な意匠です。



縄文時代のジオラマ（写真）

岩井堂洞窟（湯沢市上院内）の生活風景を想定復元したものです。開館から平成14年まで第1展示室に設置されていました。地質時代から昭和までの秋田の歩みをたどる第1展示室は、各所に設置したジオラマを軸に構成されていました。



ヤベオオツノジカの中節骨の化石

2024年 男鹿市安田海岸 当館蔵

絶滅した大型のシカ類であるオオツノジカの指骨で、三つある指骨のうち真ん中にあるのが中節骨です。

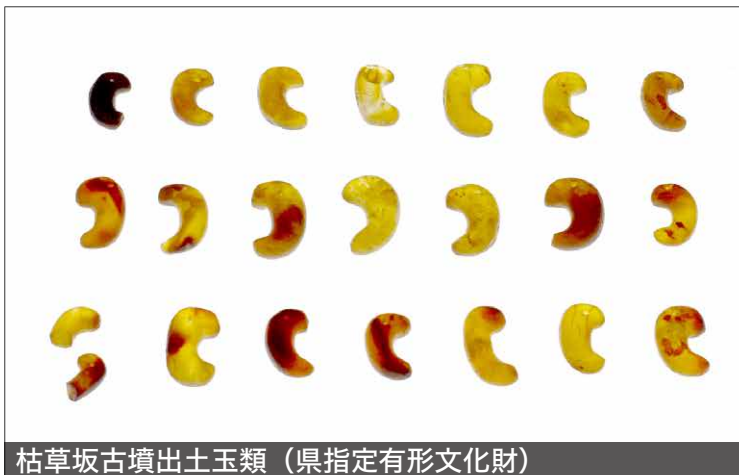
ヤベオオツノジカの化石

令和6年、男鹿市の海岸で小学生が発見した化石です。収蔵品の来歴は、職員が調査・採集したもの、県民が偶然発見したものなど、さまざまです。



岩井堂のジオラマの残余

本展では正面から見る事ができ、受け口で彫りの深い顔だったことが分かります。洞窟の外に顔だけ見えていた男性の全身像も陳列しています。



枯草坂古墳出土玉類（県指定有形文化財）

奈良時代の末から平安初期にかけての遺跡。博物館の開館準備中だった昭和47年に受入れ、当館の収蔵品となっています。



佐々木明夫氏コレクション

シャクガ科だけで9,000点にのぼるコレクションです。開館当初32,000点ほどだった当館の収蔵品は現在194,000点に達しています。その7割近くを寄付資料が占めており、博物館活動の基礎をなす収蔵品は、県民のご協力によって成り立っています。

令和7年9月27日(土)～11月16日(日)

かく、えがく。

— 菅江真澄遺墨資料展 —



《雪の道奥雪の出羽路》(個人蔵)より

■展示概要

江戸時代後期の紀行家・菅江真澄（1754～1829）は、各地を旅して歩くなかで様々な記録を残しました。真澄が生涯で残した著作数は200冊以上に及ぶといわれ、その内容は日記・地誌・随筆など、多岐にわたります。また真澄の記録の大きな特徴は「図絵」を描いたことです。真澄は文章と図絵で様々な事柄を記録しました。今回の「かく、えがく。」展では、そうした真澄の記録を、それぞれの手法や内容に準じて分類整理し、項目立てて展示紹介しました。真澄が「文字」で書いたもの、「図絵」で描いたものを紐解きながら、真澄の記録の輪郭を辿っていき、真澄の考え方や生き方、価値観や行動理念といった「菅江真澄の核心」に迫る展示を目指しました。開催期間中には多くの方に来館いただき、真澄自筆の資料をじっくりと見ていただくことができました。

■展示構成

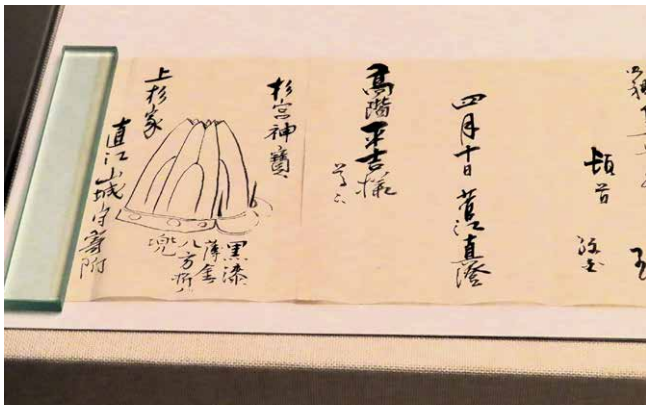
【序 章】菅江真澄とは

【第1章】かく

- ◆記す ◆詠む ◆寿ぐ／呪う ◆写す
- ◆綴る ◆編む ◆伝える

【第2章】えがく

- ◆山河 ◆沼・潟・湖 ◆海 ◆清水 ◆滝
- ◆石・岩 ◆動物 ◆植物・藻類・菌類 ◆奇貨
- ◆神仏 ◆板碑 ◆人形神 ◆人々の暮らし



【終 章】最期に記したのは

■展示資料紹介

【菅江真澄和歌短冊(個人蔵)】

今回、初公開となる資料です。真澄自身が詠んだ和歌を短冊に認め、お世話になった家に置いていったものと考えられます。展示では全部で12点の短冊を紹介しましたが、そのうち4点の短冊を並べると、紙の上下の模様が繋がっていることが分かります。元々一枚の大きな打曇料紙を、真澄が短冊の大きさに切って使用したのでしょう。打曇とは和紙の漉き染めの一種で、藍染の繊維を細かく裁断し、紙の天地や片隅に雲がたなびくように漉き込んだ料紙のことをいい、「雲紙」とも呼びます。

(真澄部門：角崎大)



令和7年10月8日(水)～12月7日(日)

秋田の先覚記念室 企画コーナー展

秋田の酒と人

展示構成

- 1 日本酒の歴史
- 2 伊藤恭之助
- 3 伊藤仁右衛門
- 4 伊藤忠吉
- 5 花岡正庸
- 6 秋田の酵母と米

令和7年度の秋田の先覚記念室・企画コーナー展「秋田の酒と人」は、秋田がいかにして「美酒王国」としての地位を築いたのか、その歴史と情熱を紐解く内容となりました。秋田の酒造りは長い歴史を持ちますが、大正時代頃までは、灘や伏見の酒に比べて格下と見なされた時期もありました。しかし、明治以降の技術革新がその運命を大きく変えます。

本展では、酒造りの近代化を牽引した4人の先覚者に焦点を当てています。自社の経営だけでなく秋田県醸造試験場の設立に尽力した伊藤恭之助、品評会で秋田初の優等賞を獲得し全国にその名を轟かせた伊藤仁右衛門、寒冷地の特性を活かした「寒地醸造法」を確立した伊藤忠吉、そして科学的アプローチで酒造技術を向上させ「秋田吟醸酒の父」と称された花岡正庸です。彼らの挑戦は、単なる産業の振興に留まらず、地域全体で品質を高め合うという現代的な産業発展のモデルとなりました。また、彼らの技術研鑽の伝統は、現代の酵母や酒米の開発にも受け継がれています。今なお全国で愛用される「きょうかい6号酵母」や「秋田流花酵母（AK-1）」などの酵母や、酒造好適米「あきた酒こまち」の存在は、秋田が技術面で全国をリードしてきた証です。

「伝統的酒造り」がユネスコ無形文化遺産に登録された今、改めて秋田の酒が持つ文化的価値と、先人たちが繋いできた技術の結晶を感じることができる展示となりました。
(秋田の先覚記念室:鈴木秀一)



企画コーナー展ポスター



展示の様子



展示資料(昔使われていた木製の酒造りの道具)



講演会の様子

活動報告

第二の学校？－博物館のセカンドスクールの利用－

秋田県立博物館では、展示室の見学や講師を派遣する出前授業などにより、児童生徒の学びをより深く、豊かにすることを目的としたセカンドスクールの利用を受け入れており、こども園から高等学校まで、毎年多くの学校団体にご利用いただいています。

学校の授業や教科書の内容から一步踏み込んだ、博物館ならではの展示品や資料に接し、好奇心に目を輝かせる生徒たちに質問攻めにされることもしばしばです。

今年度はクマの被害が大きな話題になったことから、自然展示室のクマの剥製が大人気でした。生きているクマを間近に見ることはできませんが、展示室のクマは至近距離でじっくり観察し、毛並みや爪の鋭さを実感することができます。ニュースや本では知ることができない、体験的な学びを得ることができるのもセカンドスクールの大きな利点です。

当館は秋田県の歴史・自然・文化など、様々な分野について学ぶことができる総合博物館です。生徒の皆さんが、自分たちが住む秋田という地について、知りたいならここ、県立博物館！と覚えていただければ、なにより嬉しく思います。

(学習振興チーム：三浦たみ子)



環境点検を起点としたミュージアムIPMの取組

博物館は、地域の自然史資料や歴史・民俗資料など、かけがえのない文化財を将来にわたって守り伝えていく役割を担っています。その中で、資料の保管・展示環境の維持は重要な業務の一つです。保管・展示環境には、カビや害虫といったさまざまなリスクが常に存在しています。その対策として、多くの博物館で取り組みが進められているのが「IPM（総合的有害生物管理）」という考え方です。

IPMとは、Integrated Pest Managementの略で、薬剤だけに頼るのではなく、害虫やカビが発生しにくい環境を整えることで被害を未然に防ぐことを基本とする総合的な管理手法です。清掃や整理整頓、温湿度管理、定期的な点検と記録といった日常的な取り組みを積み重ねることで、文化財への虫菌害リスクを最小限に抑えることを目的としています。薬剤による人や資料、環境への負荷を抑えながら、長期的に持続可能な保存管理を目指すのが、IPMの大きな特徴といえます。当館ではこれまで、年間を通じた温湿度の計測や昆虫トラップ調査などのモニタリングを行い、害虫が発生しやすい時期や侵入経路の把握を進めてきました。

こうしたこれまでの取り組みを踏まえ、今後は把握できたリスクを日常業務における環境管理へどのように反映させていくかが重要な段階となっています。そこで今年度、ミュージアムIPM委員会が設置され、現状把握と今後の取り組みの検討に向けて、館内環境の点検を実施しました。床や棚の埃の状況、段ボールなど紙類の保管状況、外部とつながる扉や壁・天井の状態など、虫菌害につながる環境リスク要因について、職員がペアとなり、リスクの程度を確認しました。

環境点検を進める中で、倉庫の一角から開館初期に使用されていたと考えられる展示パネルや関連物品が見つかりました。これらは開館から50年にわたる博物館の歩みを物語る資料でもあります。今後も大切に受け継いでいくもの、時代や役割の変化を踏まえて整理や保管方法の見直しを検討するもの、別の活用の可能性を探るものなど、館内環境の在り方とあわせて考えていく必要があることを改めて認識する機会にもなりました。

今回の環境点検の成果は、多くの職員の手で現場を確認したことにより、さまざまな気づきを共有できた点にあります。一人ひとりの気づきと小さな改善の積み重ねこそがIPMの基盤になります。今後も点検と実践を継続しながら、当館の施設特性に即した適切な資料管理と環境づくりに取り組んでまいります。

(展示・資料チーム：藤中由美)



資料保管状況のチェック



常設展示室内の点検



複数の目で資料を確認

朱墨の符号 — 佐藤初太郎の旧藏品 —

土器や石器を座敷いっばいに広げ、楽しそうに談笑する二人の男性。これは、明治時代の放浪の絵師・蓑虫山人が描いた『蓑虫仙人画記行』の一コマです。中央に描かれているのは、当時の脇本小学校（現男鹿市）校長・佐藤初太郎。彼は、男鹿周辺で採集した土器・石器等の膨大なコレクションを持つことで知られていました。

初太郎は単なる収集家ではありません。明治28年に東京人類学会へ入会、明治31年には、縄文人が接着剤に用いた黒い物質は天然アスファルトであると学会誌で初めて指摘するなど、学問の世界でも大いに活躍しました。彼の死後、その貴重な収集品の数々は石川理紀之助の尽力により、県立秋田図書館へ納められ、「簡易郷土博物室」設置のきっかけとなりました。秋田県が所蔵する考古資料の、記念すべき第1号となったのです。

昭和51年に図書館から移管され、当館所蔵となったこの資料ですが、長い年月の中で「どこまでが初太郎の資料なのか」がはっきりしなくなっていました。そこで現在、当館では資料に直接記された注記と呼ばれる文字情報を手掛かりに、初太郎旧藏品を特定する作業をすすめています。

調査で見えてきたのは、初太郎の几帳面さと研究熱心さ、そして資料への深い愛情です。

試行錯誤の末に確立された彼の注記スタイルは独特で、朱墨を使い、「曼陀羅堂」を「マ」、田中を「T」といった自分にだけ分かる符号を、目立たない場所に小さく記していました。また、完形土器の底には、赤い縁飾りの小さなラベルを丁寧に貼り付けています。一方で、小さな土偶などにはほとんど注記がありません。おそらく「資料の美観を損ないたくない」という気持ちの表れでしょう。見落とされにくい色を選びつつも、資料の美しさを損なわないように配慮する。初太郎の資料への眼差しが伺えます。

また、最近の調査ではこれまで不明だった彼の出自についても明らかになってきました。明治18年の『秋田師範学校一覧』によると、彼は南秋田郡秋田町、秋田県士族の生まれで、明治17年7月に23歳1か月で師範学校を卒業したようです。逆算すると、生まれは文久元年（1861）6月、そして、45歳の若さで亡くなったこととなります。年齢が分かったことで、不思議と初太郎という人物の輪郭がクッキリとしてきたように感じます。

初太郎の旧藏品とその人物について、調査は今も続いています。

（考古部門：加藤朋夏）



初太郎の注記
上：朱墨の符号
下：紙ラベル



明治27年7月、蓑虫山人は初太郎を訪ね4日間滞在した。『蓑虫仙人画記行』（当館蔵）

2026年度 展示スケジュール

企画展示室

企画展

秋田の大地と 成り立ち



秋田県の大地がどのような地質活動で形づくられてきたかを、各時代の岩石・化石・鉱物を通して紹介します。実物標本の展示を通じて地質の世界を身近に感じ、ジオパークなど地質を学べる場所にも関心を広げていただける展示です。

4月25日(土)
～6月28日(日)

特別展



話題の展覧会が東北初開催。絶滅した生物の化石や標本を展示し、絶滅した理由を紹介します。「優しすぎて絶滅」、「筋肉ムキムキで絶滅」など、驚くべき理由で姿を消した生き物たちは、生態系や地球環境の不思議を物語ってくれます。

7月11日(土)～8月30日(日)

企画展

シン・秋田画人伝 補遺と訂正のジレンマ

秋田の美術を網羅した井上隆明著『秋田書画人伝』は刊行から半世紀が経ちました。その後も県内の博物館、美術館、関係機関の学芸員によって画人たちの調査研究が続けられています。展覧会ではその研究成果を照合し、『秋田書画人伝』の画人たちの事績について補遺と訂正を試み、作品とともに紹介いたします。



9月19日(土)～11月29日(日)

企画展

アスファルト 土瀝青コネクション — 縄文の知恵 × 明治の知識人 —

縄文人が接着剤として使っていたのは、土瀝青（天然アスファルト）ではないか――。明治31年、この事実を初めて指摘したのは、秋田の人でした。何故彼は、土器や石器にこびり付いた黒いモノの正体を見抜けたのか？その後の考古学研究で見えてきた縄文のアスファルト利用の実態とは？土瀝青を鍵に、ヒト・モノ・地域の繋がりを探ります。



12月19日(土)～2027年4月4日(日)

菅江真澄資料センター企画コーナー展

秋田の先覚記念室企画コーナー展

ふるさとまつり広場

- 子どもの成長を願う～天神人形～
4月23日(木)～6月16日(火)
- 秋田藩と真澄
5月23日(土)～7月12日(日)
- わけあって絶滅しました。展 関連展示
7月11日(土)～8月30日(日)
- これまでとこれから
一菅江真澄資料センター開設30周年記念展一
7月25日(土)～9月27日(日)
- 災いを防ぐ～ショウキサマ～
10月1日(木)～11月17日(火)
- 後藤宙外と払田柵跡
10月7日(水)～12月6日(日)
- The Scientific Eye -真澄の科学的視点-
10月17日(土)～12月13日(日)
- 新年に向けて～縁起物～
12月3日(木)～2027年2月2日(火)
- 春の訪れ～ひな人形・押絵～
2月25日(木)～4月6日(火)